■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

12　若林幹夫「「誰か」の欲望を模倣する」

■目標　全体の主旨を捉えた上で設問に答える。

■追跡

①　カリスマやスターに強く惹きつけられている場合、人はしばしばそのカリスマやスターのようになることを欲望し、彼らが身につけたり、勧めたりするものを自らのものにすることで、自分自身もカリスマやスターに近づこうとする。このとき、カリスマやスターが身につけ、勧めるものに対する欲望は彼／彼女自身のものというよりも、カリスマやスターの欲望や価値基準に従属し、カリスマやスターを模倣したものとしてある。さらに、カリスマやスターに対する彼／彼女の熱狂や欲望すら、もしかしたら友人の誰かや、気になるタレントや芸能人の誰かが、そのカリスマやスターを支持し、彼らに熱狂していたからかもしれないし、テレビや雑誌でその人物をカリスマやスターとして取り上げる記事などを読んで、自分もまた惹きつけられたのかもしれない。そうだとすると、そのカリスマやスターへの欲望すら、そもそもは私自身のものではなく、誰か他の人間の欲望や、メディアの情報をなぞるところに成立しているということになるだろう。

図式化できる内容は図式化する。特に、冒頭の情報処理は以下の読解速度を速める。

・カリスマの身につけるものへの欲望＝カリスマの欲望の模倣。×自分の欲望。
・カリスマへの欲望＝他の人間の欲望や、メディアの情報の模倣。×自分の欲望。

「誰か」の欲望を模倣する、というタイトルの内容がズバリ出ている。実感できる？できるよな。他者を経由した欲望を自分の欲望だと思っているっていう状態。オッケー、先に進もう。

②　同じことは、特定の**読解問題1**ブランドやキャラクターに夢中になり、コレクターのように買い集め、それらに関する情報の収集も怠らないような場合にも見出だされる。その熱中の発火点は、もしかしたら友人の誰かや、ちょっと気になるタレントや芸能人の誰かが、そのブランドやキャラクターをお気に入りだと語っていたからかもしれない。あるいはまた、自分の友人や身の回りの誰かが、他のブランドやキャラクターを気に入っているから、それと〝かぶる〟ことなく自分らしさを発揮するために、そのブランドやキャラクターを選んだのかもしれない。

ブランド・キャラクターおたく。ブランド・キャラクター・フェチ。それもまた、「友人・タレント・芸能人」という他者の欲望をマネることからスタートする。逆に、他者の欲望の対象とずらすために、別のものを欲望する。いずれにせよ、他者の欲望が媒介（つなぎ役）となって、自分の〈欲望〉が生まれている。自分から純粋に発する欲望（好き♡）なんてないのかもしれない。

このとき、ブランド・キャラクターは、欲望の向かう対象として機能しているが、それは、おなかが減ったからそれを欲する、といった性質の欲望とは違う。寒いから上着がほしい、というとき、別にブランドがなんであろうが、温度が保持できれば、欲望は満足するはずだ。しかし、ブランド・キャラクター・マニアと化してしまった場合、その欲望は留まるところを知らない。

③　人が何かに夢中になったり、熱狂したり、欲望したりする。夢中といい、熱狂といい、欲望といい、それらは普通、人の内側から湧き起こる内発的なものと考えられる。だが、右のように考えるなら、内発的なものと考えられる熱中や欲望も、そもそもは自分がいわば〝模範〟とする他者や、対抗する他者との関係で芽生えたものだということになってしまう。他者に対抗している場合ですら、「対抗する他者と同じように、けれどもその相手とは違うブランドやキャラクターをお気に入りにする。」という意味では、やはり他者を模範とし、模倣しているのだ。子どもにとっては親が、しばしばそうした模倣や対抗の対象であり、その関係は成長してもしばしば継続する。モデルにするにしろ反発するにしろ、親が模倣や対抗（という名の模倣）の対象になっているのだ。

・好き♡＝内発的なものじゃない――外発的なもの（他者と同じでいたい／いたくない）
・他者＝友人、芸能人、有名人、そして、〈親〉。

ある程度読んで来て、整理がついたら、**☆図式化したメモをつくる**といい。これはおすすめする。繰り返しメモを作るうちに、簡潔で的確なものが作れるようになる。初めは自分がわかればいい、というレベルでいいが、だんだん、だれにでもわかってもらえるようなものに進化していくだろう。これは、スライドを作って、発表するときの力とも結びついていく。理解は表現と一体になって進化する。

④　こうした場合、人は自分にとってなんらかの形で有意味な誰かの価値基準に従って、何かを欲望している。そのとき人の欲望は、ブランドやキャラクターなどのモノや記号に向かっていると同時に、カリスマやスター、友人や親といった他者にも向かっている。「あの人がもっているあのブランドが欲しい。」というとき、人は「あのブランド」をもつことで「あの人のようになりたい。」と思う。もしも「あの人」がもつのが他のブランドであれば、その別のブランドを欲望するかもしれない。あるいはまた、「あの人とは違うブランド」をもつことで、「あの人」を凌駕しようとするかもしれない。このとき、欲望はまっすぐに特定のモノに向かうのではなく、模倣や対抗の対象となる「誰か」を経由し、「誰か」に媒介されて特定のモノを見出だし、それに向かう。人はモノを欲望すると同時に、その欲望を媒介する誰かを同一化の対象として欲望したり、あるいは同一化を望みつつ対抗的に乗り越えようとする対象として羨望したりしているのだ。

最後の一文を自分がわかるレベルで書き直せるだろうか。ブランドの例なら――、

私は、そのブランドがほしいと思うとき、どこかで、そのブランドを身につけているあの子みたいになりたい、という気持ちを同時に抱いている（のかも）。でも、あの子みたいにはなれっこない。私はだから、あの子とはゼェーッタイ違うブランドを身につけてやるんだ。

親に対して、親のようになりたい／なりたくない（乗り越えたい）という感覚が働くことには、実感がもてるのではないかな。他者、といっても、親と友だち、遠い有名人とでは、吸引力／反発力ともに質的に異なるだろう。親という他者は、特異的な存在かもしれない。客観視しにくいし、逃れられないもんね。

⑤　フランスの文芸批評家・哲学者のルネ・ジラールは、欲望が「欲望する主体」から「欲望される客体」へとまっすぐに向かうのではなく、「欲望の媒体」として模倣される第三者を媒介として主体から客体に向かうこうした関係を指して「三角形的欲望」と呼んでいる。三角形的欲望において、私は私の欲望の主体ではない。私の欲望は、他者やその欲望に従属しているからだ（図1）。

理論的にいうと、こうなる。初めからこう書かれてしまうと、わかりにくかったかもしれないが、ここまでの例を経由すれば、どういうことをいっているのかはわかる。「三角形的欲望」とは何か、なんて聞かれたら、遡り、同じことを言っている箇所を参照しながら、具体的なイメージに基づいて書けばいい。

・欲望は、「あたし（欲望する主体）」から「ブランド（欲望される客体）」へとまっすぐに向かうのではなく、「あたしがなんか気になる人（欲望の媒体）」として模倣されるあの子（第三者）みたいになりたい気持ち（を媒介として）あたし（主体）からブランド（客体）に向かう。――①あたし②ブランド③気になる人、の三角形。

⑥　この欲望の三角形で模倣の対象となる欲望の媒体は、キリスト教徒にとっての神や聖者のように、とうていそこに到達することなどできない彼方に存在する場合もあれば、隣人や友人のように張りあったり同調したりできる身近な存在の場合もある。さらに、そうした他者が具体的な「誰か」としては必ずしも名指せない場合もある。

モデルっていうことですね。神、先人、親、先輩、有名人、1組の松本君などなど。具体的な「誰か」じゃないという場合って？　何かの憧れのイメージみたいなもの、たとえば、努力して栄冠を勝ち取る勝者のイメージ、とかって、具体的にはいろいろあるだろうけれど、誰々とはいえないっていう場合も想像できるね。漠然とした勝利者のイメージ。

⑦　このとき、模倣の対象となり、欲望を媒介していたのは、直接的には隣近所や同僚などの具体的な他者であったかもしれない。だが同時に、そうした具体的な他者たちは、「世間」や「みんな」という漠然とした人間のあつまりを代表する最も身近な対象としても見出だされていたことだろう。またそこでは、広告やコマーシャル、報道などのメディアを通じてもたらされる情報やイメージも介在していたはずだ。この場合、欲望の媒体となっていたのは直接的にはメディア、つまりマスメディアだが、そうしたマスメディアもまた「世間」や「社会」一般を表象し、代表するものとして受けとめられる。とすればそこで、本当に模倣の対象となり、欲望を媒介する第三者の位置にあったのは、メディアの向こう側に人びとが見出だす「世間」や「社会」ということになろう。

ちょっとていねいにたどったほうがいい。具体的に考えてみよう。子どもの視点を例にすると、

お父さん――子どもにとっては、大人の世界の代表。働く人のイメージの代表。働く人のイメージは、テレビのドラマに出てくる、ネクタイして働いている、あんな感じ。テレビという窓には、社会が映ってる。実際には行ったことないけど、お父さんもあんなところで働いてるのかな。「世の中はな」ってお父さんもいってるし。お父さんを代表とし、その向こう側にある世界を、マスメディアを通じてイメージとして形成していく――。

「本当の模倣の対象＝テレビの向こう側にイメージされる世間・社会」

マスメディアのない時代なら、子どもは親たちから語られる世間（社会）のなかに模倣すべき対象をイメージしただろう。

〈社会〉は、私がそうなりたいもの／そうなりたくないものを供給する源泉になっている。というより、私が何かを欲望しているとき、よく見つめると、私は何かによりかかって、それをほしいと思ったり（それじゃなくこれだと思ったり）している――そのよりかかっているものにつけた名前が〈社会〉（＝他者（の集まり）のイメージ）だということだ。

⑧　この「世間」や「社会」は自分以外の他者たちのあつまりやつながりとして具体的な対象性をもつと同時に、自分が見たり、接したりするさまざまな他者たちの向こうに、それらの他者たちを部分として含む集合体として見出だされ、あるいは想像されるものでもある。そして私たちは、そうした「世間」や「社会」を模倣し、その欲望を我がものとすることで、そうした「世間」や「社会」を生き、現実化するのである。このとき、欲望の三角形の頂点には「社会」がある。と同時にそこでは直接的な欲望の対象を媒介として、「社会」が欲望されているのだとも言えるだろう（図2）。

凝った言い方になっているが、自分なりに解きほぐしておこう。図式化メモを作るのもいい、手を動かして納得していく。それができれば、答案をつくるときも、はっきりした形で綴れる。

例えば、「直接的な欲望の対象を媒介として、「社会」が欲望されている」ってどういう

こと？

社会（他者）がいいと思うもの（欲望するもの）を、ぼくもいいと思う（欲望する）。ぼくは、何かをほしいと思い、行動することによって、社会（他者）と同じように考え行動する。「社会（他者）を生きる」「社会を現実化する」っていうのはそういうこと。社会なんて、手で触ったりできないものだけれど、何かを欲望するとき、どうしても、〈社会のいうとおり／社会にたてついて〉、欲望するしかない。それは、社会（他者）のようになりたい／なりたくない、と、社会（他者）に対して（正／負の）欲望を向けているのと同じことだ。

ぼくによって社会が欲望されている＝ぼくは社会（他者）を欲望している。そうすることによって、ぼくはぼくの欲望を「わがもの」とする。

⑨　この本質的、根源的な模倣としての「社会化」、つまり他の人びとと同じような社会的存在となることの土台と延長の上に、そうした共通の言葉や振る舞いが実際に個々の人びとによって語られ、振る舞われる際の偏差やヴァリエーションとして「個体性」や「個別性」、あるいは「個性」と呼ばれるものがある。そしてまた、そうした根源的な模倣の延長線上に、欲望の媒体によって媒介された趣味や嗜好やスタイルの模倣と、それを我がものとしてゆく過程がある。

・（根源的な）社会化＝他の人びとと同じような社会的存在となること。他の人びとと共通の言葉をあやつり、ふるまいをすること。おぎゃあと生まれて、母の言葉を身につけて、お兄ちゃんとおなじようなことができるようになって、近所の人にあいさつができるようになって……という誰もが経てきた過程。

・個性＝同じようなふるまいの中での（少しの）ちがい（偏差やヴァリエーション）。お兄ちゃんより元気にあいさつするね！とか……。

・欲望の媒体（メディア）によって媒介（紹介）された趣味や嗜好やスタイルの模倣＝今これめっちゃはやってんねんでーって広告とかで知って、あ、それ、おれ、今度買おう、ってなるやつ、とか。

⑩　生物としてのヒトが社会的存在としての人間になり、社会を生きるとは、生物としてのヒトが他者を媒介とし、模倣して、社会を自らの中に引き入れるということだ。このとき、人は、それが自らにとっての規範となり、規準となるという意味で社会を鑑とすると同時に、自らの姿をそこに重ね、同一化することを欲望するという意味でも社会を鏡とする。そして自己の意識や身体は、そのようにして他者や社会の欲望を引き入れ、我がものとしてゆくという意味で「社会の鏡」となる。社会を生きるとき、人は社会という鑑＝鏡の中で、自らもそこに社会が映し出される鏡になる。欲望と模倣とは、こうした鑑＝鏡の間の止むことのない光の反射なのだ。

・社会＝規範＋同一化の欲望対象。社会は、すべきこと／してはならないことを指導する

〈厳しい存在〉。また、一体化していたいと欲望する対象としての〈母や恋人〉みたいな存在。お手本＝鑑。自分を映すもの＝鏡。二つの機能を持ってる。

・自己の意識や身体＝社会の規範＋欲望を映し出しているもの。知らんうちにそうなってるんやね。「自分は自分。社会とか関係ない」ってことは、ありえへんわけです。純粋な私、なんて、ないない。

⑪　日本語で「主体的」と言えば、普通は人に従ったり、人を真似したりするのではなく、自分自身で独立して決定し、行動するということだ。だが、「主体」と訳される英語のsubjectやフランス語のsujetといった言葉には、「従属した」とか「臣下」という意味もある。なぜなら「主体」とは、与えられた役割やルール、期待や規範の下で、それを我が身に引き受けて遂行する存在という含意があるからだ。欲望する主体も、他者や他の存在を欲望するという関係を我がこととして引き受ける存在なのであって、その欲望の対象や方向は必ずしも自己の内側から発する必要はない。むしろ私たちの欲望は、モデルとしての他者や社会的イメージを追いかけ、それを内面に取り込み、模倣するところにしばしば現れる。

これは知識として記憶しておくこと！

●「主体」とは、与えられた役割やルール、期待や規範の下で、それを我が身に引き受けて遂行する存在。また、他者や他の存在を欲望するという関係を我がこととして引き受ける存在。

だからさ、「主体的」っていうのは、本質的に「対話的」なわけさ。だからさ、「従属」って別にワルイことじゃなくて、むしろ、「従属」を経て、「対話的」に「主体」になっていくわけさ。

余談。戦争に負けたとき、敗戦国は、戦勝国に従属する。しかし、時を経て、敗戦国は戦勝国及び国際社会と対話し、対話する中で、主体性を取り戻していく。――というのが、ありうべき、敗戦国の戦後の過程だ。なのに、日本は米国に従属しっぱなしじゃん。――というのが、ずっといわれ続けているこの国の課題。

⑫　鏡を見るとき、私たちは確かに自らの意思で鏡を見る。だがそのとき私たちは、鏡の中に映った私の像に、そしてまた鏡の中にこれから現れるべき新たな装いの私の像に捉えられ、自らが望む私の像を鏡の中に映し出すべく躍起になる。このとき私は鏡に、そしてまた鏡の向こうに想像的に見出だされるモデルにとらわれ、従属し、**読解問題2**そのモデルを模倣することによって自らを主体化してゆくのだ。

■読解問題

1　「ブランドやキャラクター」はどのような社会的役割を果たしているか、まとめなさい。

全体を通して考える。

人は社会の価値観（規範）や欲望を模倣したり、それに対抗したりして、自分の価値観

や欲望を形成するのだった。

「ブランドやキャラクター」の背景には、友人や有名人や、他者＝社会の価値観や欲望が見えているのだった。つまり、「ブランドやキャラクター」は、人が社会を模倣するとき、具体的に社会（他者）の価値観や欲望を見える形で示しているものだ。

構文は、「ブランドやキャラクターは、――という機能を果たしている。」とすれば、ぴったりする。

A　ブランドやキャラクターは、社会（他者）のある価値観や欲望を見える形で示している。

B　人は社会の価値観（規範）や欲望を模倣したり、それに対抗したりして、自分の価値観や欲望を形成する。

Aに、Bを繰り込みたい。

【解答例1】人は社会の価値観（規範）や欲望を模倣したり、それに対抗したりして、自分の価値観や欲望を形成するが、ブランドやキャラクターは（特定の他者への模倣や抵抗を誘発することによって）、その社会の価値観や欲望を見える形で示す役割を果たしている。

【解答例2】ブランドやキャラクターは、〔人がそれに対して模倣したり、対抗したりするところの〕社会の価値観や欲望を、目に見える形で示す役割を果たしている。

2　「そのモデルを模倣することによって自らを主体化してゆくのだ」とはどのようなことか。

（方法1）全体を見渡して、材料を集め、整頓する。

●材料1「主体とは、与えられた役割やルール、期待や規範の下で、それを我が身に引き受けて遂行する存在。また、他者や他の存在を欲望するという関係を我がこととして引き受ける存在。」

●材料2「そうした根源的な模倣の延長線上に、欲望の媒体によって媒介された趣味や嗜好やスタイルの模倣と、それを我がものとしてゆく過程がある。」

●材料3「鏡の中にこれから現れるべき新たな装いの私の像に捉えられ、自らが望む私の像を鏡の中に映し出すべく躍起になる。」

過程を整理してみよう。

・他者を欲望するという関係・与えられた規範・期待を、我がこととして引き受ける。

・模倣された他者をわが身に発見する。

・模倣された他者とわが身の差異に気づく。

・自らが望む私の像を求めて、（繰り返し）あらたな模倣を模索する。

（方法2）この段落全体をふまえて見通しをつける手もある。

（1）☆傍線部を延長し、「このとき」って何？と考えてみる。

「鏡を見るとき、私たちは確かに自らの意思で鏡を見る。だがそのとき私たちは、鏡の中に映った私の像に、そしてまた鏡の中にこれから現れるべき新たな装いの私の像に捉えられ、自らが望む私の像を鏡の中に映し出すべく躍起になる。このとき私は鏡に、そしてまた鏡の向こうに想像的に見出だされるモデルにとらわれ、従属し、そのモデルを模倣することによって自らを主体化してゆくのだ。」

（2）あると、1文目のいいかえが2文目である（きれいに対応している）ことに気づく！

「自分が鏡を見るとき、鏡の中に映った自分の像に、そしてまた鏡の中にこれから現れるべき新たな自分の像に捉えられ、自らが望む自分の像を鏡の中に映し出すべく躍起になる。」

「自分が鏡を見るとき、自分は鏡に、そしてまた鏡の向こうに想像的に見出だされるモデルにとらわれ、従属し、そのモデルを模倣することによって自らを主体化してゆく」

比べることによって、「主体化」を敷衍（ふえん）してみると、

「他者の欲望を模倣している（現にとらわれている）自分の像を見る。これから現れるべき新たな自分の像にふさわしい他者を求めて模倣しようとする。自らが望む自分の像を実現しようと模倣を繰り返す。」

あの人のようになりたいと思って、マネするが、マネしている鏡の自分は、モデルとは微妙に差異（個性）を含んだ姿であることに気づき、また新たに、誰かの欲望をマネすることで新たな自分像を造り出そうとする。このようなたんなる一度きりのマネでは終わらない追求のダイナミズムが、「主体化する」ということだ。

「そのモデルを模倣することによって／自らを主体化してゆく」と☆**切り身**にして、それぞれを補充する形で組み立てるといい。

【解答例】（他者を欲望し、その価値観に従うことを、自ら引き受け、）他者の欲望を模倣する中で、模倣された他者をわが身に発見し、模倣された他者とわが身の差異に気づくことによって、繰り返し新たな模倣を模索し、自らが望む自分の像を追求していく、ということ。

■発展問題

模倣なくして主体化なし、と論じられていたが、では、あらゆる模倣は主体を導くのか？自分の経験を引用し、本文の議論と照らし合わせた上で、考えを論じなさい。

●重要語「私とは他者」＝私には私の全体像は見えない。猫が鏡に映った自分の姿を見て、なんだ、こいつ？という様子で眺めたりすることがあるが、そのとき、猫（自分）にとって鏡像は他者だ。これは人間でも同じである。人間は、鏡像を自分だと思うが、逆にいうと、鏡像を見ることでしか、自分を見ることはできない。鏡像は、自分のある一面を映したものだが、その断片を手がかりに、私は私の全体像を想像する。自分像は、このように、自分の外にあるものを通じて構成されていくしかない。他者に自分を映す、というのはたとえだが、他者との共鳴や差異（対話）という運動の中で自分（自分を成立させようと変化する主体）は成り立つ。